

秋月禪学と私(4)

—「真空妙用」に生きる— 最終回

竹村 牧男

禪の修行は、坐^ざ禪と作^{さく}務の両輪からなっている。古来、禪林では諸堂や庭の掃除、田畑の農作業、建物などの修理・管理など、さまざまな仕事、それも肉体労働を重視してきた。雲水らの修行共同体を律する規則を、「清規」という。清衆の規矩^{ききょ}(※1)の意であるが、その清規を初めて制定したことで知られる百丈懷海禪師には、次の話がある。

「禪師は年老いてもなお日課の作務を休めてやめなかった。……老軀をひさげて孜々として勤勞されるさまのあまりのいたわしさ、もったいなさに、弟子たちが『老師はお休みにしてください』と言うのだが断じてきき入れない。そこで、あるとき弟子のひとりが禪師の作務の道具を隠しておいた。これならいくら老師でも仕事をやめられるであろうと。確かにその日、禪師は作務を休まれた。しかし、そのかわりにいくらすめても一日中頑として食事の箸を執られなかった。そのときあの有名な一句をはかれた。云く、『一日作さざれば、一日食^{くら}わず』(一日不作、一日不食)」（秋月龍珉『公案』）。

禪では、これほどまでに、働くことを尊重するのである。単に坐禪して瞑想にふけてばかりいるのでは、死人禪として大いに呵せられる。坐禪して、自我に死にきて、身心を脱落したとき、かえって全体作用とも言われるような大いなる働きに自ずから出てくる。禪はむしろそこそそを重んじる。臨済宗では、その働きは、棒・喝のように勇ましく、曹洞宗では、威儀即仏法・作法は宗旨というように行持綿密のありかたに出てくる。いずれにしても、働きのない禪は、禪ではないであろう。

曹洞宗は、只管^{しかんたば}打坐を標榜し、じっと坐る。面壁でひたすら坐るのである。臨済宗は、公案という修行者への問題を用いて参禪させる。対面形式で坐るが、独参といって師家の室内に入り、一対一で問答して修行していくことも重視するのである。公案には、大体、古来の禪問答(『無門関』や『碧巖録』などに収められたものなど)が使われるが、日本で作られたものもある。中には、「沖に走っている帆掛け舟を止めてみよ」、「富士山を灯心で結んで、線香でかついで持ってこい」、「春日の局が幽霊を済度するとき、茶碗の中に水を一軒入れてみずから箸をぬいて茶碗の上に横たえて済度したというが、衲僧ならどうして済度する」といったものがある。これらは、秋月

竹村 牧男 / たけむら・まきお

1948年、東京生まれ。71年、東京大学文学部卒業。学生時代より秋月龍 老師に参禪する。文化庁宗務課専門職員、三重大学助教授、筑波大学助教授、同大学教授を経て、現在、東京大学文学部教授。筑波大学名誉教授。居士号・祖瑨。著書に、『唯識三性説の研究』、『唯識の探求』、『親鸞と一遍』、『良寛さまと読む法華経』、『西田幾多郎と仏教』、『般若心経を読みとく』(今年7月発行)など多数。



龍珉の『公案』に公表された。本来、室内に深く秘せられるべきものを、龍珉は、伝統が衰われるのはあつという間のことだとして、非常に危機感から、公案修行の世界のことを世に広く紹介したのであった。

龍珉によれば、臨済宗中興の祖である白隠に由来する公案体系は、「法身・機関・言詮・難透・向上」とあり、これに「末後の牢関」を加えるという。「法身」は、自己の本性を体証するもの、「機関」は、悟りに腰を落着けず、日常の差別の境涯において順逆二境にさまたげられず、自己と万法(すべての存在)とびたり円融するように工夫する。悟後の修行である。「言詮」は宗旨を言句をもって表現する訓練。「難透」は、透り難い公案のこと。「向上」は、その先ということ、いわば悟り奥さを抜き、修行の跡も払っていくものである。以上のように、公案にも、ただ悟らせるのみのものだけでなく、それを日常に働かせていくもの、言語活動にすら進ませていくものなどがあることが知られるであろう。禪の修行は、そのように、ただ静寂な境地を尊ぶだけではなく、むしろ活発に働いていくことをめざすものになっている。

これらの子細については、前掲『公案』に詳しく記されているので、関心のある方は参照されたい。龍珉は公案を好んで研究した。公案があればこそ、禪の命脈も保たれている一面に留意してのことだった。その著『公案』に鈴木大拙が「序」を贈っている。「秋月君は、この種の公案なるものを、今この書で詮せんとする。平地に波瀾を起こすどころでなくて、泥沼をかき乱すものと言ってよいかも知れん。考えてみればいらぬおせっかいだ。が、君はこの方面において蘊奥^{うんおう}(※2)を尽くした人だから、かくのごときものを著作するにはもっとも適切な論者だと言ってよい。……」大拙一流の濃やかな愛情のこもった文章である。

龍珉と大拙の出会い、終戦もないころ、東慶寺書院においてであったという。それより以後、龍珉はただひたすら大拙の人と著書にみちびかれて、「禪道」と「禪学」という二足の草鞋をはいて、「禪」という一筋の道を歩んでいったのであった。昭和34、5年頃、大拙が松ヶ岡文庫に落着いたのには、ほとんど毎週のように大拙を訪ねて、禪について教を受けたという。それは、大拙への入室(師家

秋月 龍現 / あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒。同大学院修了。

宮田東環老師、古川堯道老師、宇坂光龍老師、大森曹玄老師に参拝。

埼玉医科大学教授、花園大学教授などを歴任。埼玉医科大学名誉教授。臨済正宗真人会師家として門弟を多数養成。月刊誌『大乗禅』主幹を長らく務める。禅道と禅学とを究め、さらに仏教学・宗教哲学の分野にも活躍した。宗教間対話の促進に努め、晩年は海外の国際集会などにも積極的に参加した。1999年、9月示寂。

著書に『秋月龍現著作集』全15巻、『道元入門』『公案-実践的禅入門』『新大乘-仏教のポスト・モダン』『禅とイエス・キリスト(対談集)』『世界の禅者-鈴木大拙の生涯』『誤解だけの仏教』『現代(ポスト・モダン)を生きたる仏教』『無心と神の国(対談集)』『絶対無と場所-鈴木禅学と西田哲学』など多数。



左から3番目 秋月龍現老師

の室に入って参禅すること)にもほかならなかったという。

龍現によれば、大拙は、「真空妙有では未だ尽さざるところがある。内の一字を改めもち来たれ。自ら代わって云く、真空妙用」と言ったという。前回、「空」は「自他不二」という話をした。『般若心経』などでは、「色即是空・空即是色」というが、その「空即是色」の色は、真空妙有と言われる。ただの色ではない、空と一体の色であるがゆえに、妙有というのである。しかし大拙は、それではまだ未徹在(※3)である、真空妙用に出てこなければいけないと言う。妙有では、未だ静的・理的であり、思想的にとどまる。妙用として初めてよく動的・事的となり、宗教的たりうるというのである。言うまでもなく、その働きが出てくるのは、空の悟りの中で「自他不二」を自覚しているからである。その自覚から、おのずから他者のために働かざるをえないのである。こうして、大拙はしきりに「用」ということの大切さを説くのであった。

このことについて、興味深い話がある。白隠は、洞山の五位の一句を改めようとした。洞山の五位というのは、今、詳しく述べる余裕はないが、正中偏・偏中正・正中来・兼中至・兼中到という五つの境涯のことで、おのおのに詩が付されているものである。この中、兼中到には、「有無に落ちず誰か敢て和せん。人々尽く常流を出でんと欲す。折合して還た炭裡に歸して坐す」の詩が付されていた。ところが白隠は、この詩だけはいただけないというのである。そこで白隠があらためて付した詩は、次のものであった。「徳雲の閑古雛、幾たびか妙峰頂を下る。他の癡聖人を備うて、雪を担うて共に井を填む」。

おそらく、煩惱の世界を解脱して、また生死輪廻の世界にもどってきたとしても、「炭裡に歸して坐す」と、坐してじっとしているだけではだめだというのであろう。そこで白隠は、修行の跡も消し去って、とがったところもまったくなくなった境地にある者が、その利害打算を超えた立場から、報いを求めずに黙々とひたすら働きつづけるあり方こそ、兼中到という至高の境地にふさわしいと見たのであろう。

この白隠の話を、大拙は非常に評価するのであった。大拙は『中庸』に出る「君子の道は、費にして隱」という言葉をとりあげ、龍現に語る。「ところでわしにはわしの解釈があるんだがな。それは『費』

は作用で、はたらきだ。君子の道は『真空妙用』、やってやってやりぬく働きの所にある。いつもいう白隠の『他の癡聖人を備うて、雪を担うて共に井を填む』だ。五位の兼中到の著語(※4)にこの句をおいたのは白隠の大見識だ。そしてそれは禅者のいう跡を払え跡を払えだ。『羚羊角を掛く』という句があるだろう。君ら室内で著語におかなんだかな。シナの人がきたら、わしのこの解釈、ひとつ意見を聞いて見ようと思うが、君はどうだ」。

さらに大拙は、「ただ滅茶苦茶に働くのだ、働いて働いて働きぬくのだ。その意味でわしは、白隠禅師が五位の『兼中到』に著語を置き直した見識を高く評価したい。外のことはともかく、あれだけでも白隠は偉いと思う」とも語るのであった。(秋月龍現著作集7『鈴木禅学入門』)

大拙の薫陶を受けた龍現が、真空妙用をしきりに語ったことは言うまでもない。それは龍現独自の言説によって表現されたわけではなかったが、龍現の禅学の根柢に厳然として存在していた。いや、何よりも龍現は、真空妙用に生きていた。京都花園大学の講義の帰りに、その足で都内で禅会を主宰するなど、文字通り東奔西走の生涯、働いて働いて働きぬく生涯であった。まさに禅将の面目躍如であった。

(※1) きまり、規則のこと。

(※2) 学術・芸道などの奥深いところ

(※3) まだ徹底していない、完全でないという意味

(※4) 公案の見解などに対し、その心を表す短い語句を選んで示すこと。著語とは、語をおくという意味